不登校経験者への登校支援とその課題
——チャレンジスクール、高等専修学校の事例から——

伊藤 秀樹

1. 問題設定

本研究の目的は、不登校経験者を積極的に受け入れる義務教育後（後期中等教育段階）の学校における登校支援の事例から、不登校経験者の登校継続を支える要因と今後の課題について検討することにある。

近年、中学校・高校での不登校経験者を積極的に受け入れている義務教育後の学校／教育施設が増加している。このような学校／教育施設には全日制高校だけでなく、定時制高校、通信制高校、高等専修学校、サポート校などさまざまな学種・形態をとる機関が存在する。私立の高等学校においても高校多様化政策の流れを受け、三部制・単位制・総合学科の定時制高校である東京都のチャレンジスクール（2000年〜）や埼玉県のバレットスクール（2005年〜）のように、不登校・高校中途退経験者の受け入れを目的とした学校が新たに設立され、2倍を超える入試倍率に見られるように高い人気を集めている。

森田（2003）は不登校経験者への追跡調査から、不登校、不登校に至るまでや不登校になったことで抱える苦しみ、悩み、心の傷などの「心の問題」だけでなく、進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクといった「進路形成の問題」が重たわることを指摘している。そうしたなかで、不登校経験者を積極的に受け入れる義務教育後の学校／教育施設は、不登校生徒が抱える「進路形成の問題」の克服への重要なアカターとなり得ると考えられる。なぜならこれらの学校／教育施設は、内申書の問題で卒業後の進学に困難が伴う中学校での不登校生徒や、不登校によって高
校を中途退学した生徒の進学先となり、彼らに将来の職業生活で必要となりうる知識や技能を習得させ、最終的に彼らを中等後教育や高卒条件での就職といった中卒時点より幅広い進路へとつなげるためである。

ただし、これらの学校／教育施設による不登校経験者の進路形成の可能性を問う前に、そもそも不登校経験者がこれらの学校／教育施設に登校継続できているのかということを問わなければならない場合もある。というのも、これらの学校／教育施設には、通信制高校やサポート校のように日々の登校継続が卒業の要件となるないところもあるが、定時制高校や高等専修学校といった学校のなかには、登校して授業に出席し単位を取得することが卒業要件となるところも多いためである。たとえば、先述のチャレンジスクールやパレットスクールでは、単位制であることから、生徒は比較的自分の興味や生活リズムに合わせた時間割設定が可能だが、授業に出席し単位を取得しないことには学校を卒業することはできない。

このように登校継続が卒業要件となるような学校では、生徒の登校継続の過程に困難が予想される。これまで、不登校の根源には学校がもつ性質やその実践があるという指摘がさまざまな方面からなされてきた。たとえば、「一斉指導や点数競争を強いる学校の枠が、子どもの個性やニーズに合わなくなっている」（奥田 2005, そこでより引用）という言葉に代表されるように、フリースクール関係者などからは学校がもつ管理主義・画一主義・競争主義といった性質が不登校の原因にあるという批判が投げかけられていた（貴戸 2004）。また、宮台（1999）や内藤（2001）では、学校が形成する学級集団について、その固定的な学級集団自体が高ストレス状態を生み出す元凶であるとして批判がなされている。

本研究では、不登校経験者を積極的に受け入れながら登校継続による単位取得が卒業要件となる学校を対象とし、①不登校経験をもつ生徒たちはどのような理由によって登校を継続しているのか、②生徒の登校継続はどのような学校側の実践・要因によって支えられているか、③その過程からどのような課題が見えてくるか、という3つの分析課題を設定し、2校の事例から検討していく。

現在、不登校経験者を積極的に受け入れる義務教育後の学校／教育施設の実践に着目した研究は非常に少ない[1]。そのため、これらの学校／教育施設が不登校経験者の「進路形成の問題」を克服しうるアクターであり、実際に高いニーズがある状況にもかかわらず、これまで、①不登校経験をもつ生徒の登校支援や進路形成に有効である学校／教育施設への実践・要因を理論化する、②不登校支援における学校／教育施設の貢献可能性と今後の課題を検討する、という2点の検討が十分に行
不登校経験者への登校支援とその課題

われてこなかった。本研究は「今日の学校教育や児童生徒が抱える種々の問題の理解だけではなく、それに対する対応や支援の取り組みに目配りし、かつその意義や課題を検討しようとする」（酒井 2007, p.9）教育臨床社会学の立場から、上記の2点の検討の起点となる知見を提示することを目指すものである。

2. 分析枠組み

以上の問題関心に基づき、本研究では不登校経験をもつ生徒の登校継続の理由・背景について検討していくが、これらを問ううえで、森田（1991）のポンド理論による不登校生成モデルを参照しながら分析を行っていく。

森田（1991）は、登校回避感情を抱く中学生が多数存在するという調査結果から、現代の子どもたちが「誰しもが不登校への可能性をもっているといっても過言ではない事態」（p.239）にあると述べる。これは、Hirschi（1969）が犯罪・逸脱の原因論として展開するコントロール理論と、人間は本来的に逸脱への可能性をもつという前提を共有するものである。そのため森田は、コントロール理論の説明図式を不登校現象に援用し、子どもたちがなぜ不登校行動を起こすのかという問いではなく、むしろ子どもたちがなぜ登校回避感情をもちつつも登校するのかという問いの立て方が必要であると述べる。

そして、森田は子どもたちが登校するその理由について、Hirschi が逸脱行動を押しとどめる要因として挙げた社会に対する個人の絆（ポンド）の4要素を修正し、不登校行動を押しとどめるポンドの4要素を提示している（表1参照）。子どもたちが学校社会との間に結ぶこれらの4種類のポンドは、その総和の強弱が不登校現象の発生確率に違いを生むものであると想定されている。

表1 森田（1991）の不登校生成モデルにおけるポンドの4要素

| ①対人関係によるポンド | 両親、教師、友人など子どもにとって大切なキ・パーソンに対して抱く愛情や尊敬の念、あるいは他者の利害への配慮などによって形成される対人関係のつながり |
| ②手段的自己実現によるポンド | 教育や職業における、達成することで自己実現を図ることができるような目標へのアスピレーション、目標の実現可能性、目標への努力から得る充足感 |
| ③コンサートリーな自己実現によるポンド | 学校生活の諸活動から得られるコンサートリーな（現在進行中の活動それ自体から起こるような）欲求充足 |
| ④規範的正当性への信念によるポンド | 登校や出席に関する道徳的義務感情や、登校時間や出席、校則などを構成している規範的境界全体に対する正当性 |

209
今回の事例となる学校に在籍する不登校経験をもつ生徒は、学校に「行かない／行けない」と行けない」経験をもちながらも現在は学校に通っている者たちである。学校に通うことが「当たり前」ではないはずの彼らの登校継続の過程に対して、「なぜ登校するのか」という問いを立てその理由を説明しようとするポンド理論のアプローチは、適合性の高いものだといえるだろう。そこで本研究では、彼らが登校を継続できている理由について、4種類のポンドの強まりという視点から検討していく。

ところで、表1で示した4種類のポンドは、これまでポンドの総和の強弱が不登校の発生確率に影響を及ぼすことは指摘されていたが、それぞれのポンドが不登校生徒の再登校・登校継続に対してどのくらいの影響力をもつかについては検討を加えられることはなかった。本研究では、事例となる学校の不登校経験をもつ生徒たちの「今の学校に通える理由」を確認していく際に、4種類のポンドとの対応関係を念頭に置くことで、不登校生徒の再登校・登校継続とそれぞれのポンドの関係性についての示唆を与えることができるだろう。

3．対象と方法

本研究では設定した目的を達成するために、東京都のチャレンジスクールであるX校、高等専修学校であるY校の2校を対象としてフィールドワークを行った。両校の概要は表2に記載。（両校の概要は表2に記載。）この2校を対象に選定した理由は、両校が下記の理由から「成功事例」といえ、生徒の登校支援に有効な実践・要因を抽出するうえで適切な事例であると考えたためである。

まず、X校・Y校はともに不登校経験者が積極的に受け入れている学校である。Y校に関しては、法人内の幼稚園、小・中学校で受け入れていた自閉症の生徒が実社会に出るための最終教育現場として立会われたという非常に特殊な経緯をもち、現在も自閉症の生徒が6割近く在籍するが、同時に障害をもたない生徒（Y校では彼らを「健常な生徒」と呼ぶ）も多く受け入れており、不登校経験者もかなり前から受け入れてきた。実際に「健常な生徒」の半数近くが不登校・高校中退の経験をもつ。

そのなかで両校は、授業に出席して単位を取得することが卒業の要件となるが、在籍の大多数が登校を継続している。「成功事例」と呼べる学校である(2)。また、両校では卒業時には大多数の生徒が進学先・就職先を決定して卒業していくという点にも留意しておきたい。

筆者は、X校には2006年11月、Y校には2005年6月から訪問を行い、教師・生
不登校経験者への登校支援とその課題

表2 X校・Y校の概要

<table>
<thead>
<tr>
<th>学校の形態</th>
<th>X校</th>
<th>Y校</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学校の形態</td>
<td>公立・定時制高校 (三部制・単位制・総合学科)</td>
<td>私立・高等専修学校 (高校段階の専修学校)</td>
</tr>
<tr>
<td>開校年数</td>
<td>開校して数年</td>
<td>約20年</td>
</tr>
<tr>
<td>学科・コース・系列</td>
<td>保育系、情報系など</td>
<td>情報処理科、美術科など</td>
</tr>
<tr>
<td>修業年数</td>
<td>4年制(3年で卒業可)</td>
<td>3年制</td>
</tr>
<tr>
<td>カリキュラムの自由度</td>
<td>2年次以降は必修科目を除き受講する授業の時間や科目を選択できる (単位取得には出席が要件)</td>
<td>毎日登校し6～7時間、学校から指定されたカリキュラムを学ぶ (単位取得には出席が要件)</td>
</tr>
<tr>
<td>1学年の人数</td>
<td>約150人(5クラス)</td>
<td>約80人(3クラス)</td>
</tr>
<tr>
<td>(うち不登校経験者)</td>
<td>7割約</td>
<td>約2割</td>
</tr>
<tr>
<td>(うち高校中退者)</td>
<td>約1割</td>
<td>約1割</td>
</tr>
<tr>
<td>授業出席率</td>
<td>約8割</td>
<td>9割以上</td>
</tr>
<tr>
<td>中退(転出)者</td>
<td>約1割</td>
<td>若干名</td>
</tr>
<tr>
<td>長期欠席の生徒</td>
<td>約1割</td>
<td>ほとんどない</td>
</tr>
<tr>
<td>卒業後の進路</td>
<td>就職約2割、進学約6割、</td>
<td>自閉症の生徒以外は就職・進学(大学含む) = 1:3、その他は毎年若干名</td>
</tr>
<tr>
<td>その他約2割(大学浪人含む)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

徒へのインタビュー、学校生活や学校行事などの場面の参与観察、校内資料や新聞記事などの収集を実施してきた。インタビューは、X校では校長、副校長、教諭3名、生徒7名に、Y校では教諭4名、卒業生2名、生徒13名に対して行い、生徒に関しては中学校・高校で不登校経験をもつ生徒を主な対象としている。他にもインタビューでは多くの教師・生徒から話を聞いたが、これらは参与観察の様子とともにフィールドノーツに記録している。本研究ではこれらのデータを分析に用いる。

なお、本研究では複数の事例を扱う強みを生かすため、主にX校とY校に見られる共通点を摘むことで、より一般化可能性の高い知見を抽出することを目指した分析を行う。

4. 不登校経験をもつ生徒の登校継続の理由

4.1. X校・Y校の不登校経験をもつ生徒の特徴

まず分析に入る前に、X校・Y校にはどのような不登校経験者が多いのかということを簡単に確認しておく。

X校・Y校の教師からは、何らかの心理的な要因によって学校に通えなかった
者（保坂（2000）がいう「神経症的不登校」）が不登校経験をもつ生徒の大多数を占めることができるが、その中には「ナイーブなところがある」「ちょっとした言葉で傷ついてしまう」というように、不安を抱えやすい生徒も多いという。

また、近年不登校児童・生徒の中に学習障害（LD）、注意欠陥・多動性障害（ADHD）、アスペルギー症候群などの発達障害を抱えた者が多数いることが指摘されているが（奥地 2005など）、X校やY校でも発達障害を抱えた生徒は少なくらず在籍するという。無気力や非行傾向によって学校に足が向かない「脱落型不登校」（保坂 2000）と呼べる状態であった生徒は、両校ともに在籍するが多くはない。

4.2. 不登校経験をもつ生徒がX校・Y校に通える理由

次に、上記のような特徴をもつ不登校経験をもつ生徒にとって、X校・Y校への登校を継続している理由を押さえていく。表3は、X校・Y校でインタビューを行った不登校経験をもつ生徒（a）のなかで「X校ないしY校に通える理由」として言及した者が、通える理由としてどのようなものを挙げたかを示したものである。

|  |  |  |  |  |  |
|---|---|---|---|---|
|  | 友人の存在 | 教師の存在 | 部活動 | 学校が変わった | 授業が理解できる |
| X校 | Aくん | 3年生 | O | | |
| | Bさん | 3年生 | | O | |
| | Cさん | 3年生 | | | |
| | Dさん | 2年生 | | | |
| | Eくん | 2年生 | | | |
| Y校 | Fさん | 卒業生 | | | |
| | Gくん | 卒業生 | | O | |
| | Hくん | 3年生 | | | |
| | Iさん | 3年生 | ▲ | | |
| | Jくん | 3年生 | | | |
| | Kさん | 3年生 | O | O | O |
| | Lくん | 2年生 | | | |
| | Mさん | 2年生 | | O | |
| | Nさん | 2年生 | | ▲ | |
| | | | | 6(1) | 4 | 4(1) | 3 | 1 |

※ O：X校・Y校に通える理由 ▲：X校・Y校に一時的に通えなくなった理由

彼らに不登校になったきっかけについても尋ねたところ、「いじめ」「授業について
不登校経験者への登校支援とその課題

「不登校になった」といった学校生活に起因するものから、自らの心理的な問題や家庭の問題、さらには「学校に行くのが面倒くさくなった」といった無気力によるものまで、そのきっかけは人によってさまざまであった。また不登校になった理由を覚えていないと語る生徒もおり、不登校のきっかけからは共通点は見出せなかった。

ただし、彼らのほとんどが不登校当時に、「学校に行かなければならない」というプレッシャーは感じていたが「行けなかった」という葛藤を抱えていたということを語っている。これより、彼らの多くがX校・Y校入学以前から「学校に行かなければならない」という規範を保持していた、つまり学校に対する規範的正当性への信念によるボンドを保持していたということが指摘できる。

そして、彼らが語る「X校・Y校に通える理由」からは、ある傾向を見出すことができる。それは、現在の登校継続についての語りの大多数が、学校での人間関係、つまり対人関係によるボンドに依拠しているということである。

まず、表3でみるように「X校・Y校に通える理由」として「友人」「教師」の存在を挙げる生徒が多い。ただし、それだけではなく、「部活動」を理由として挙げた4名のうち3名からも、部活動の仲間が自分の支えになった様子が語られている。たとえば、部活動がなかったらY校にも通い続けられたかわからないと語るJくんは、「仲間もいっぱい増えて、何かあれば助け合ったりするんで、それがすごく助かって」と、部活動の仲間に支えられている様子を語っている。

また、「学校が変わった」ということがX校・Y校に通える理由だと語る3名からも、「高校になってそういう状況（筆者注：不登校であったこと）を何も知らない人ばっかりなので、行けたんだと思っています」[X校、Cさん]というように、人間関係の変化というものが大きな要因である様子が語られている。

そのような語りの背景として、以前在籍していた学校ではすでに築かれてしまった人間関係が再登校への大きな障壁となって立ちはだかっていたという可能性が指摘できる。たとえば、Y校に通える理由に「場所が変わったってのもあるかもしれない」と語るMさんは、中学校に通えなかった理由について以下のように語る。

（学校の友だちが）迎えに来てくれて、先生とも家に来て、でなんかもう一度それを裏切っちゃうというか、来たのに出なかったりするとまた行きづらくなって、で行くって言ってたのに行かなかったり、寝坊しちゃったとか、行かなくて教室に居場所がなくなって。
他の生徒たちからも、再登校した時のクラスメイトの反応やすでに形成された友人関係に入り込むかという点が気になり、学校に足が向かなかったという経験が語られている。他にも、いじめが不登校のきっかけとなった生徒がいることを考えると、多くの生徒が、以前の学校では友人に関するボンドが切れていて、さらにボンドを結べる見込みも立てにくい状態だったという可能性に留意しておきたい。

ちなみに、X校・Y校の生徒たちは決して他の3種類のボンドを登校継続の理由として語ることができない状態にあるわけではない。X校やY校では、選択科目（X校）や専門教科（Y校）という形で専門的な教育による進路形成が図られているし、またそれらの授業そのものを「楽しい」「強さが変わる」と語る生徒も少なくない。さらに、チャレンジスクールであるX校では、単位制であり時間割を自分の興味や生活リズムに合わせて比較的自由に設計できるというメリットもある。これより両校は、学校への手段的自己実現によるボンドやコンサマトリーナの自己実現によるボンドが形成しやすい環境であると考えられる。また、「学校に行かなければならない」という学校に対する規範的正当性への信念によるボンドは、不登校当時からも結ばれていたものである。

しかしそうしたなかで、通える理由を尋ねたときに、これらのボンドに対する言及に比べて対人関係によるボンドに依拠した言及が大多数を占め、また、コンサマトリーナの自己実現を与えるものとして考えられる部活動についても、その中の対人関係が通える理由として語られる背景となっているケースが複数含まれていた。加えて、通える理由として復数の理由を挙げている生徒に関して、「まず友だちがいたことが大きいということですね。あとちゃんと授業についてもいていた」「Y校、Gさん」というように、3人とも通える理由として対人関係を優先的に言及しているという特徴があることも指摘しておきたい。以上より、今回インタビューを行った生徒たちについては、不登校のきっかけは多様であるが、かつての不登校状態から現在の登校の継続における過程で、対人関係によるボンドの形成・変化が他のボンド以上に重要な役割を果たしていると考えることができる。

そこで、次に注目したいのは、「なぜX校やY校では、不登校経験をもつ生徒たちが対人関係によるボンドを形成できているのか」ということである。今回通える理由として多く言及された教師と友人は、逆に不登校の原因としてもよく挙げられるものでもある(6)。次節では、教師や友人が通えない理由ではなく通える理由とされるために、X校やY校ではどのような教育実践が行われているのか、また他の学校にはどのような要因が隠されているのかということをみていく。
5. 不登校経験をもつ生徒の登校継続を支える実践・要因

5.1. 教師の徹底的なサポート

まず、教師がなぜ「通える理由」となっているのかということについては、教師の生徒に対する徹底的なサポートが有効に働いているということが挙げられる。

生徒へのインタビューでは、教師のサポートによって登校を続けることができたと語る生徒が複数みられた。たとえばX校のDさんは、友人関係の問題で学校に行きたくないと思った時期に教師に相談に乗ってもらった経験から、X校に通える要因として「先生たちの支えがあるってのが一番大きい」と語る。

このようなサポートを行うために、X校でもY校でも、携帯の番号を生徒に教えるなど、教師が生徒との距離を近づけるようとする様子がみられる。もちろん、生徒の相談などを「受け入れる」態度だけではなく、特にY校でみられるのが、「（コミュニケーションをとることが苦手な生徒には）とことん毎日のように毎時間のように話しかける」[Y校、O先生] というような、「生徒に積極的に関わる」という態度である。たとえばY校のHくんは、他の学校に比べて教師が「生徒に入り込んでくる」として、登校が支えられたようなエピソードを語っている。

精神的に疲れ切った時期があって、「今日は疲れました」みたいなかったらう感じで書いたノートがあったんですけれども、それを見て担任の先生が「どうしたの」ってすぐに駆けつけられていて、でそこからボンと背中押されて、またやっていこうなと思って感じて。

特に、学校に通えなくなってしまった生徒については徹底的に登校支援が行われる。たとえばY校の観察では、長期間欠席していて久しぶりに登校できるようになった生徒の隣に担任の先生が座り、「心配していいからね」などの声かけをしながら授業を一緒に受けるという様子が見られた。また、Y校では教諭が欠席した生徒を家まで車で迎えに行ったり、場合によっては生徒とのコミュニケーションを深めることを目的として学校に一緒に宿泊することもあるという。もちろんX校に関しても、長期欠席の生徒には電話などで密に（生徒が望む場合は毎日）連絡を取るなどの積極的な働きかけが行われている。

215
このような教師の生徒への手厚いサポートは、Y校の場合生徒に「深追いしすぎ」と指摘されることがあるものの、大多数の生徒から良いイメージをもって受け入れられている。教師に対する不信感をもつ生徒も少なからず入学してくるが、「先生を“人間”として見るようにしました」というように、教師がさまざまな例も複数の生徒から指摘されている。筆者の観察中には卒業生が教師のもとを訪ねて学校を訪問してくる光景も両校でたびたび見られ、教師と卒業後もつながるような親密な関係を結ぶ生徒が多いということが指摘できる。

さらに、教师との良好な関係性は、フリースクール関係者から批判される「生活指導」という管理主義的実践と不登校経験者の登校経験を重視する機能を併せもつということにも触れておきたい。

X校やY校ではその教育実践の中で、生活指導ということが重視されている。X校の校長は、不登校経験をもつ生徒の学校だから甘口にするのではなく、卒業後に競争社会に出ていくことを考えて指導していくという方針をとっていると語る。
実際にX校では制服の着こなしや髪の色についての検査が定期的に行われていて、違反生徒には指導がなされる。同様の考えからY校でも、制服・頭髪についてはもちろん、提出物やプリントの忘れ物など細かい部分まで徹底した生活指導が行われる。

しかし両校では、教師と良好な関係が築かれていくために、生徒たちは教師の生活指導を従うようになる。たとえばY校のQくんは、教師たちの生活面での細かい指導に対して「1・2年の時はすごいー先生たちだなと思ってたけど、3年になってみると、合ってんだとかありがとうみたいなんじゃないか、そう捉えちゃう」と、生活指導に対する認識の変化を語っている。

5.2. 「痛み」を共有する生徒集団

次に、X校・Y校の友人関係が「通える理由」となる背景について、X校・Y校の生徒集団の特殊性があることを指摘しておく。

インタビューでは、「友だちがやっぱりできましたね。それがここまで来れた理由なのかーって」[Y校、Hくん]というように、友人がいること/できてきたことが学校に通える理由として複数の生徒から指摘されている。また、生徒同士のサポートによって登校が支えられる場合もある。Y校の卒業生のFさんは、Y校でも急に1・2日ほど登校できなくなることがあったが、友人のサポートがあって登校が支えられた様子について以下のように語る。
不登校経験者への登校支援とその課題

（中学校に比べて通いやすかった理由について、体調が悪いくて遅刻した場合に）
教室に行けば自分の身の回りの友達がこう机を聞いてくれる、「どうしたの今日は？」みたいな感じで理由を聞いてくれたりとすると、みんなの痛みを知ってから、こう来れなくなならないようにしてくれる。

ここでFさんが語る「みんなの痛みを知ってる」という言葉に注目したい。X校のAくんからも、「この学校は不登校が多いから、お互いの痛みがわかる」という面があるということは指摘されている。Y校では不登校経験をもたない生徒関しても、Kさんは、Y校には「事情がない人は入ってこない」と評し、不登校や学業成績、あるいは素行の問題のために他の高校には入学できない状態であった者が多く、その過程ですごく傷ついてきた人たちがあると語っている。X校とY校には、過去の学校生活などで辛い思いをしてきた生徒が集まるという共通点があると考えられる。

Fさんの語りからは、生徒集団の「痛み」の共有が友人へのサポートを生み出す基盤となる可能性が示唆される。しかしそれだけでなく、生徒集団の「痛み」の共有は「人の嫌がることをしない」という行動にもつながるということも複数の教師から指摘されている。たとえばX校のR先生は、「これまでいじめだとか人間関係で悩んできた子がすごく多くて、その分人に優しくすること、人の嫌がることをしてはいけないということをすごくわかっている生徒が多い」と語る。

これらの語りより、X校・Y校では、過去に学校生活などで辛い思いをしてきた者が集まり、生徒同士が互いが抱える「痛み」に共感できることから、悩みを抱えた生徒への友人同士のサポートや他者に嫌な思いをさせないような配慮が生まれやすい環境になっているという様子があるとえる。不登校経験者がX校・Y校には通えるということの背景として、生徒集団が「痛み」を共有するという学校環境が大きな役割を果たしているということが推察される。

5.3. 生徒間の関係に対する教師・学校側の介入／コーディネート

しかし、生徒同士の関係は「学校に行きたくない理由」を与えるものにもなりうるということを指摘しておかなければならない。X校・Y校の不登校経験をもつ生徒たちは、生徒同士で関係を結ぶうえで以下のような2つの問題が起こるという。

第一に、不登校のために同年代の人々と交流した経験が少ないことから、相手の
思うことがうまく理解できないためにトラブルになるケースが多いという。

たとえば X 校の D さんは、「あんまり学校に来てない子たちが来てるので、そういう関係で人間関係が普通の高校よりうまく伝わらなかったりする部分でギタشرطするってのはたぶん普通の高校よりはあると思う」と語る。また、X 校では S 先生も同様に、同年代との交流のなさから「(相手と) うまく距離をとったりとか、言ってることがどこまで本音かわからない」生徒がいて、生徒同士でトラブルになることが少なからずあるということを指摘している。Y 校でも、O 先生によると「対人関係がすごく苦手な子で、一方的に連絡して本当に都合が悪くて断ったりするところですね」だよて一人で盛り上がっちゃう」というような、相手の事情や考えをうまく理解することができない生徒はいるという。

第二に、他者との距離を置きすぎて孤立してしまう生徒がいるということが、X 校でも Y 校でも指摘されている。

その背景には、不登校であったことから他者との距離感をうまくつかめないという側面もあるが、過去の辛い学校体験のために他者との接触を恐れる生徒もある。C さんは X 校の生徒同士の関係について、「話すでも、人のプライベートには絶対に踏み込まないし、すごく慎重なんですよ。人間関係の作り方がなかなか。それで見てても、なんかいろいろあったのかなって」と、他者との距離を近づけるのに強い警戒心をもつ者がいることを指摘している。

対人関係での困難は彼らにとって登校への大きな障害として立ちはだかり、人間関係でちょっと悩んだり、「友だち同士でトラブルがあったらもう明日から来ないって口にする子は多い」 [X 校、R 先生] と。しかも、彼らは「コミュニケーション能力がないために人間関係が壊れると修復できない」 [X 校、S 先生] 傾向があるという。そのため X 校や Y 校では、教師や養護教諭、スクールカウンセラーやが生徒の相談に乗り、場合によっては生徒先の関係に介入してこじれた関係の修復を手助けすることで、対人関係での困難の解決を支えている。

また、孤立してしまう生徒については、教師が生徒間の関係をコーディネートすることで解決が目指されることがある。たとえば Y 校では、クラス内で孤立してしまう生徒に対し、校外交談と称してリーダー格の生徒や自閉症の生徒など数人の生徒を組ませ、休日にカラオケや映画などに行かせるという方法があるという。「人を信じられなかった」という H くんは、Y 校編入当初に校外交流の機会を設定してもらった結果、徐々に環境になじめ周囲に心が開けるようになってきたと語っている。

218
不登校経験者のための登校支援の課題

さらに、両校では師徒関係の促進やコミュニケーション能力の育成を目指した実践が、運営方針やカリキュラムの中にも埋め込まれている。たとえばS先生によると、X校は単位制であるが、不登校経験をもつ生徒の間で関係性が生まれにくいことから、他のチャレンジスクールと異なりホームルームを重視し学校行事もクラス単位で活動することで学級社会を形成し、生徒間の関係を作ることを目指しているという。Y校でも、たとえば家政科の調理実習では、自閉症の生徒と健常の生徒が混じった班が構成され、健常の生徒は自閉症の生徒に指示し手助けをしなが
がら作業を進めていく。またコミュニケーション能力の育成について、国語教諭のT先生は、Y校の生徒たちは「不登校の子もそうだけど、あんまり対話を多くない」ため、「コミュニケーションが多くなければ、そういうところで生きた国語を使わなければ、教えなきゃ意味がない」と考えて授業を実践していると語っている。

ただし、宮台（1999）や内藤（2001）の批判の対象とされていた学級社会の形成という点に関しては、生徒間の関係を形成する枠として有効である反面、問題も生じる。不登校経験をもつ生徒の中に不安を抱えやすい者が少からずいるということは先述したが、たとえばX校では、中学時代に非行傾向があり攻撃的な言動をとる生徒がクラスにいるために、その言動が脅威となって学校に登校できなくなってしまい出ることがあるという。そのため、仲間集団という対人関係によるボンドの形成の大きな助けとなる学級社会の形成という方策を用いるためには、教師が生徒との距離を近づけて生徒間の関係に日ごろから目を配り、場合によっては関係に介入し、登校継続の危機に陥った場合は徹底的にサポートするといった、教師の役割がより重要なものとなると考えられる。

以上、不登校経験者がX校・Y校に通える理由の背景にある実践要因として、
①生徒に対する教師の徹底的なサポート、②生徒集団の「痛み」の共有、③生徒間の関係に対する教師・学校側の介入／コーディネートの3つの要素を挙げた（図1）。X校・Y校のこれらの3要素は、教師との直接的なボンドを強化し、また生徒集団のボンドを形成しやすい環境をさらに調整していくことによって、学校への対人関係によるボンドの形成を促し

図1 X校・Y校における登校支援の3要因

---

NII-Electronic Library Service
ているものであると言うことができる。また、教師と生徒との間で良好な関係が結ばれることで、不登校の原因として批判の対象となるような生活指導の重視や学級社会の形成といった実践が、不登校経験をもつ生徒の登校継続と両立可能なものとなっていた。

しかし、Y校の事例からは、これらの登校継続支援からでは克服できない課題もみられる。それは、Y校では登校継続できたにもかかわらず卒業後の進路で就業・就学を継続できなくなってしまう卒業生が出るという、登校継続と進路形成との非連続という課題である。そしてこの課題の背景は、不登校経験をもつ生徒の登校継続に対人関係によるボンドの形成が必要とされ、また学校でその形成を促すような実践が行われているという状況によって映し出される。

6．不登校経験をもつ生徒の「卒業後」という課題

Y校は、「卒業後の進路にフリーターは認めていない」という方針から、進路指導に熱心に取り組み、結果ほぼすべての生徒が進学先・就職先を決定して卒業していく。しかし、卒業生がY校の次の進路で早期離職・中途退学してしまう(7)，フリーター・無業へと流入してしまうことが課題とされ、その予防に取り組んでいる。

これまで早期離職・中途退学した卒業生の中には、不登校経験がありY校に入学した者も少なくなく含まれる。Y校では登校を継続できた彼らの中で、なぜ中途退学や早期離職に至る者が出てしまったのか。その背景には、Y校の教師と生徒の言葉を借りると、生徒たちの登校を支えるために「温室」化しなければならないY校の環境と、卒業後の社会生活との間にギャップが生じるということがある。

Y校では卒業後の社会生活を見据えて、ボランティアやインターンシップ、あるいは全校生徒の前でのスピーチコンテストなどさまざまな体験機会が学校行事として埋め込まれているし、コミュニケーション能力の育成やマナーの習得などを指向して授業内容やカリキュラムが設計されたり、生活指導が行われたりする。しかし、それと同時に、「不登校の子どもはほんのちょっとした雑巾な言葉がけで傷つく子もいるので、教師自身がいろいろ言葉選んであげて、温室だと思います。」[Y校、U先生]というように、Y校が不安を抱えやすいような生徒の登校継続を支えるような環境にならざるをえない側面もあるということが、教師からは指摘されている。

そのため卒業生からは、卒業後の社会生活はY校と異なる厳しい環境として感
不登校者への登校支援とその課題

筆者：じゃあ社会の荒波っていうときに、Y校の人が経験してるのは、やっぱり人間関係も大事な、Y校と人の間隔のギャップとか、そういうところです。

生徒：そうですね。やっぱりね。あそこは温室栽培だからね。守ってくれてそこから送り出してくれると、荒波にもまれたらそれはできないし、やっぱり他の人が助けてくれないし。そこから先の人たちはね。

Fさんはここで、支えてくれる他者の不在という、対人関係の変化に触れている。

卒業後の場での対人関係については、Gさんの場合、専門学校での生活について、「友だち関係上では、自分の周りだったらあまりY校の人たちと変わってなかったりが正直なところなんで、あまりそのへんは全然大丈夫だったと思いますね。」

と、Y校に似た友人関係が安心をもたらした様子を語っている。U先生も、卒業後に言葉がけや手助けをしてくれる人間関係がある場に行ける人は幸せだ、そうでない場では厳しいものがあるだろうと、卒業後の場の人間関係が卒業生たちの就業・就学の継続に大きな意味をもつことを認めている。

これより推察されるのは、Y校の不登校経験をもつ生徒たちは、卒業後の就業・就学継続に関しても、「痛み」を理解し不安を支えてくれるような他者を必要としているのではないかということである。Y校が抱える卒業生の早期離職・中途退学という課題の背景には、Y校で結ばれるような関係性の対人関係によるボンドが得られないということが少からずあるのではないかだろうか。
新設校である X 校ではまだこのような問題は把握されていないが、校長は Y 校と同様に X 校を「温室」と称し、卒業生の次の進路での生活における心配を語っている。Y 校が抱えている課題は、不安を抱えやすい不登校経験者が集まる学校/教育施設がどこでも直面することになる困難なのかもしれない。

7. 結語

本研究では、不登校経験者を積極的に受け入れながら登校継続による単位取得を卒業要件とする学校に関して、X 校と Y 校を事例として、不登校経験をもつ生徒の登校継続を支えている実践・要因と、その現状から見えてくる今後の課題について、ボンド理論における不登校生成モデルを参照しながら検討してきた。

その結果、X 校・Y 校の不登校経験をもつ生徒の登校継続には対人関係によるボンドの変化が大きな意味をもつこと、また対人関係によるボンドを強固なものとするために教師の直接的・間接的なサポートや「痛み」を共有する生徒集団が重要な役割を果たすこと、そして教師の生徒との良好な関係が、生活指導や学級集団の重視という学校の実践が不登校の原因となることを回避させる働きをもつことが見出された。教師と友人による学校へのボンドの形成を担うこれらの実践と要因は、大多数の不登校経験をもつ生徒の登校を継続させ卒業へと導いている X 校・Y 校に共通して見られることから、不登校経験をもつ生徒の登校継続を支えていくうえで有効な方策であると考えることができるだろう。

しかし Y 校の事例からは、卒業後の場では対人関係によるボンドの形成によって就業・就学継続が支えられないことで、卒業生が早期離職・中途退学の危機にさらされる場合があるという、生徒の進路形成にまつわる困難も描き出された。

ではこのような不登校支援上の課題は、どのように乗り越えが可能なのか。一つ考えられるのは、学校と卒業後の社会生活との間での対人関係の変化によるギャップを消失させるために、学校が対人関係によるボンドではなく他の 3 種類のボンドの形成を重視した登校支援（たとえば、進路形成やコンサルトリーな充足を与える授業の形成など）を行うという方法である。しかし、X 校でも Y 校でも、対人関係以外の 3 種類のボンドが「通える理由」として語られる条件を備えているにもかかわらず、生徒たちから言及される「通える理由」は対人関係に依拠したものが大多数を占めていた。また、「通えない理由」も対人関係から与えられることが少なかったり、彼らの登校を支えてくれるような対人関係によるボンドが求されている状況があるといえる。これらの学校では、不登校経験をもつ生徒たちの登校を
不登校経験者への登校支援とその課題

継続させ進路形成の舞台に乗せるためにも、対人関係から彼らの登校を支え続けていくという実践は欠かすことができないものである。

むしろこれらのギャップに対しては、「荒波」と称される社会からの歩み寄りを求めていくべきであろう。貴戸（2005）も、不登校経験者が「学校とつながる」こととにとどまらず、就労・就学によって「『社会』とつながる」ことにも困難を覚え、人々が「『社会』とつながる」形の再考を促している。そのなかで、本研究の知見をふまえて、社会の歩み寄り方について一つの方法を提示したい。それは、不安を抱えやすく対人関係のサポートを必要とする人々が認め支えながら自己実現を達成できるような就労・就学の場を、後期中等教育後に創出し、「ならべか移行」と呼べるような進路形成を可能にする、という方法である。

最後に、本研究の不登校研究への主要な理論的貢献について改めて指摘し、今後の検討課題を述べておく。

本研究では、森田（1991）の不登校生成モデルにおける4種類のボンドの影響力の差異という切り口を新たに採用することで、対人関係によるボンドの結ばれ方に後期中等教育への登校継続と卒業後の就業・就学継続が強く影響される不登校経験者の層を描き出した。これまで不登校経験者が抱える「進路形成の問題」の原因は、学歴取得などの進路選択上の不利益という点に求められていた（森田　2003）。そのなかで本研究は、不登校経験者の「進路形成の問題」（さらには「『社会』とつながる」こと）における対人関係のあり方の重要性という新たな側面を示すものである。

そしてその過程より、登校行動にもたらす4種類のボンドの影響力の差異という切り口の有効性が示されたこととも、重要な知見である。その結果、今回は異なるタイプの不登校経験者（たとえば脱落型不登校や「学校に行かなければならない」という規範を有しない不登校）の登校行動に対して、4種類のボンドがどのような影響を及ぼしているかということが、今後検討すべき課題として挙がってくる。

また、同じく今後の検討課題として、不登校経験者を積極的に受け入れる学校／教育施設で登校継続が卒業の必要条件となることの是非は、関わなければならない点であるということも、最も指摘しておきたい。

〈注〉
(1) 論文では、東村（2004）と高森（2004）がサポート校がもつ不登校支援の側面
に触れた程度である。

（2）両校のように不登校経験をもつ生徒の大多数を登校継続へと導くことは、決して容易なことではない。たとえば、ある高等専修学校の教師たちの会合では、不登校経験をもつ生徒について、「どの生徒もかなりの長欠で、別室で個別指導を行っているが、それでも登校が難しい」「登校強化月間でも皆勤の生徒は42%しかいなかった」と、生徒の登校継続に苦慮している様子が多く語られていた。

（3）インタビューに関しては、許可を得たうえでICレコーダーに録音し、逐語的に書き起こした。これらのインタビュー・フィールドノーツの記録を記載する際は、匿名性を保つために仮名を用いて表記している。

（4）もちろん、各校の実践には少からず独自性があるということは認識している。特にY校に自閉症の生徒が在籍することは、Y校の日々の実践に少からず影響を与えている。自閉症の生徒が在籍することと不登校経験をもつ生徒の登校継続との関係については、別稿で改めて詳しい検討を行いたい。

（5）インタビューを行った生徒については、自ら不登校であったと語る者、あるいはY校の前に在籍した学校で病気やケガ以外の理由で一定期間にわたり登校していないかったと語る生徒を、不登校経験をもつ生徒と定義した。

（6）たとえば、フリースクール東京シューレのOB・OGに行ったアンケート調査では、最も大きい不登校理由について、「友人をめぐるもの」と回答した者が29.6%と最も多く、「教師との関係をめぐること」と回答した者が11.6%いる（奥地 2005）。

（7）ある世代では、進学者の3割以上、就職者の約2割が卒業後3年以内に中途退学・離職を経験している（Y校の校内資料より）。

〈引用文献〉
東村知子，2004，「サポート校における不登校生・高校中退者の支援——その意義と矛盾」『実験社会心理学研究』第43巻第2号，pp.140-154。
Hirschi, Travis, 1969, Causes of Delinquency, University of California Press。
保坂亨，2000，『学校を欠席する子どもたち——長期欠席・不登校から学校教育を考える』東京大学出版会。
貴戸理恵，2004，『不登校は終わらない——「選択」の物語から〈当事者〉の語りへ』新曜社。
———，2005，『学校の問い直しがて社会とのかかわりの再考へ——不登
不登校経験者への登校支援とその課題

校の「その後」をどう語るか」『こころの科学』No.123, pp.71-77.
宮台真司, 1999, 「自己決定能力を育てる社会システムとは」三沢直子・宮台真司・保坂展人『居場所なき時代を生きる子どもたち』子ども劇場全国センター出版局, pp.43-84.
森田洋司, 1991, 『「不登校」現象の社会学』学文社。
———編著, 2003, 『不登校—その後—不登校経験者が語る心理と行動の軌跡』
教育開発研究所。
内藤朝雄, 2001, 『いじめの社会理論—その生態学的秩序の生成と解体』柏書房。
奥地圭子, 2005, 『不登校という生き方—教育の多様化と子どもの権利』NHKブックス。
酒井朗編著, 2007, 『進学支援の教育臨床社会学—商業高校におけるアクションリサーチ』勁草書房。
ABSTRACT

School Attendance Support for Students Who Have Experienced School Non-Attendance and Its Problems: Looking at Challenge School and a Koto Sensyu Gakko

ITO, Hideki
(Graduate School, The University of Tokyo)
7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo, Japan 113-0033
Email: hideito@p.u-tokyo.ac.jp

The purpose of this study is to examine factors which support the school attendance continuation of students who have previously experienced school non-attendance, and to reveal its problems, by looking at the example of school attendance support in post-compulsory schools which positively accept people who have experienced school non-attendance.

Recently, post-compulsory schools or educational institutions which positively accept people who have experienced school non-attendance have increased. These schools or educational institutions have the potential to solve the problems of career formation of people who have experienced school non-attendance. However, there has been no focus on that what kind of support is necessary for students to continue school attendance, and what the problems are.

Interviews and participatory observation carried out by the author at a certain Challenge School and a koto sensyu gakko (Upper Secondary Specialized Training School) resulted in the following four points. Firstly, the change in personal relationships from the school the student attended previously greatly contributes to the school attendance continuation of students who have previously experienced school non-attendance. Secondly, direct and indirect support given by teachers, and student groups in which "pain" is shared supported school attendance continuation by students. Thirdly, good relations between teachers and students prevent school characteristics such as life guidance and activities in the class group from causing school non-attendance.

Fourthly, however, these schools have a problem concerning the career formation of the students. There are cases in which graduates of these schools tend to leave the next school or workplace because of the non-existence of the people who have supported them when they felt uneasy. It will be the task of school non-attendance support to assist people who tend to have uneasiness and demand support from personal relationships to form their career through a "gentle shift" from post-compulsory schools or educational institutions to further schools and workplaces after graduation. In other words, to create an environment of work and education that can lead to self-realization.